



ほし ひるの星

No. 267

もくじ

アブドル・バハの言葉 ^{ことば}	2
知識 ^{ちしき}	8
クイズ.....	7
小枝 ^{こえだ} で織物 ^{おりもの}	8
ぬり絵.....	9
みんなの写真 ^{しやしん}	10
保護者 ^{ほごしや} のページ.....	11

ちしき かがく
あらゆる知識と科学は
木^きにたとえられる。

かじつ かみ あい
その果実が神の愛であれば、

かみ しゆくふく き
神に祝福された木となり、

そうでなければ、

き か
その木は枯れてしまつて、

た き
ただの焚き木になる

だけである。

アブドル・バハ



ちしき 知識

沖繩の八月の暑いある日のことでした。五人のきょうだいは暑さで苛立っていました。小学生の四人は食卓に向かって夏休みの宿題に集中して取り組んでいました。四人ともそれぞれの夏休みの課題がありました。

「こんなの大嫌いだ！」とリアズが叫びました。「なんでこんなものする必要があるんだ！外で遊んでいる方がずっとましだ！夏休みなんだから休みを楽しむべきだ！！」

「そうよ！」とシャラが言って、不満げに続けました。「アニサなんか好き勝手に遊んでるじゃないの。どうして私たちがだけが、勉強、勉強なのよ！！」すると、物分りのいいモナがため息をついて、宿題から目を放して言いました。

「シャラ、何を言っているのよ！アニサは小学生になっていないでしょ。私たちが宿題をしているとき、シャラもアニサの年のときは遊んでいたじゃないの！」

「アニサもいずれはおれたちのようになるんだ！」とアスマがモナに賛同しました。

「でも、どうして必要なんだ！」とリアズがまた主張しました。「どうしてこんなもの習わなきゃならないんだ。歴史、作文、算数、理科なんてばかばかしい…。理科はまあまあとしても、あとはくだらん！！！」

「リアズ、もし何も習わなかったら、私たちは動物と同じになるのよ。」とモナが反論しました。

「それでいいじゃないの！そのどこが悪いのよ！遊んで食べて寝るだけでいい！」と言って、シャラが椅子から跳び上がって手を叩きました。アスマが小声で言いました。

「動物は何千年前も今と同じことしかしていないんだぞ。全然進歩してないじゃないか。」みんな、アスマの方にふり向いて、少し考えました。モナが切り出しました。

「それに、何千年も前だったら、冷蔵庫も、車も、飛行機も、テレビもなかったし、自転車だってなかったわ！」

「一輪車も。」とシャラが続けました。シャラは一輪車に乗れるのが自慢でした。

「それは、何となく分かるけど。」とリアズがしぶしぶ勉強が必要なのを認めました。

「しかし、おれたちが好きなことは習えなくて、どうして嫌いな作文や歴史みたいなものばかり習わなくちゃいけないんだ。」とリアズが腹立たしそうに言いました。

「でも、読むことができなかったら、過去に発明、発見されたことから学べないだけじゃなく、これからすることも、知ることも何もできないでしょ。」とモナが説明しました。アスマが付け加えて言いました。



「それに、歴史で前に起きたことを知っている、同じまちがいをしなくてすむわけだし。歴史を憶えて置くのは大切だよ。もし昨日や先週、何をしたか思い出さなくなったら、どうするんだ。」子どもたちの話のなりゆきを、となりの部屋で、お父さんとお母さんは興味をもって静かに聞いていました。しかし、学校の先生をしていたお父さんはこれ以上黙っていられなくなりました。

「みんな、結局、正しいところに気付いたようだね。よくできました。バハオラが『**学びの本質は世の改善に貢献することにある**』と言われてるように、私たちが勉強して学ぶ本当の理由は、世の中を善くするのに役立つからなんだ。もちろん、たくさん学べば自分にもとても役に立つんだし。」

「それはバハイ子どもクラスで暗記した引用文と同じね。」と言って、モナが続けました。

「『**人間を計り知れないほど高価な宝石に富む鉾山と見なせ**』」

「それは私も知っているわ。」とシャラが跳び上がりながら続けて、

「**教育のみがその宝を放出させ**…。ええ～と…」

「その続きは一番大事なところだよ、シャラ。」とリアズが言って、後を続けました。

「『**人間にその利益を享受させることができる**』 ほら見ろ、おれだってこれくらいは知ってるんだ。」

「いいぞ、その調子。」とお父さんがほめて、「この引用文をまとめて、その意味を考えてごらん。」と言いました。そこで、みんなで始めの文章から唱えてみました。幼いアニサも一緒にできました。

「**人間を計り知れないほど高価な宝石に富む鉾山と見なせ。教育のみがその宝を放出させ、人間にその利益を享受させることができる。**」

「ねえ、ねえ、みんな、人がふつう話すように言えないの？」とアニサがたのみました。みんな笑ってしまいました。アスマが答えて言いました。

「そうだな、アニサ、人は誰でも世の中の役に立つことができる宝石のような宝をもっていて…、それが見つけ出されて磨かれると、つまり、教育されると輝き出して、世の中を善くするのに役立つと言ってるんだ。これでいいかな？」

「いい説明だ！」と、お父さんがほめました。他の子たちはアスマに拍手しました。

「だから、算数も、理科も、読み書きも、それから地理や歴史も勉強しなくちゃ。そうすれば、もっと善い世の中にするのに役に立つのよね。」とモナがまとめました。

「勉強する第一の目的は、そこにあるんだ。成績が一番になることでも、自慢できるからでも、他の人を見下すためでもないんだ。」とリアズはモナがそうであるかのように見えて言いました。

「そうよ、その通りよ！リアズ！」とモナが、リアズの思いちがいを打ち消すように言って続けました。

「たくさんの人を傷つけるようなものを創り出した、



頭のいい人たちを考えてみて。たとえば、原子爆弾とか戦争の武器などを創り出した人たちがいるでしょ。」

「だから、歴史を学ぶ必要があるんだ！」とアスマが声を上げて、続けました。

「ヨーロッパのローマ帝国を考えてみろよ。素晴らしい文明を築いたけど、その人たちはだんだん自分のことしか考えなくなって、精神的なものから遠ざかっていって、ついに帝国は滅んでしまったじゃないか。」

「知識は人間の進歩に必要なんだけど、精神の進歩と道徳の進歩と一緒に進んでいなければ、進歩は止まってしまうのよ。道徳は、精神つまり魂が守るべき人間としてのきまりなんだから。」と言って、お母さんがみんなの話に加わってきました。

「人間の進歩、つまり文明の進歩について考えてみましょう。文明を鳥にたとえると、空高く飛ぶ二つの翼があって、一方の翼は物の知識でもう一方は精神の知識なの。片方が強くても、もう一方が弱ければ、その鳥は飛べないでしょ。」

「私は空を飛んでいる鳥よ、見て。翼は二つとも強いよ。」そう叫ぶと、アニサは両腕を上下にばたばたさせながら、部屋を走り回りました。子どもたちはそれをほほ笑みながら見ていました。突然、リアズが跳び上がって言いました。

「おれのは片方だけが強いんだ！」

そして、その強い翼だけを上下にばたつかせ、哀れな首を立てて、飛び上がろうとしゃがんだり跳んだり、円を描いて回りました。その仕草がおかしくて、子どもたちは転げまわって笑いました。リアズはいつも家族のピエロでした。

「教育にはもうひとつの見方があるのよ。それを考えなくちゃあね。」とお母さんが続けました。

「何が正しくて、何が良いのか悪いのかをどこでどうやって学ぶかということ。科学では、どうやって偉大な発明をするのか学ぶけど、それを使った方がいいか悪いかは教えてくれないでしょ…。原子爆弾の発明のように

ね。何が正しくて、何が間違いなのかを決めるのは、どうやって学ぶのかしら？」

「お父さんとお母さんから！」とアニサが叫んで、無邪気に跳んだりはねたりしました。みんな笑ってしまいました。

「そうね。じゃあお母さんたちはどうやって習ったと思う？おじいさんとおばあさんからなんて言わないでよ！」とお母さんがほほ笑みながら言いました。さらに続けて、

「バハオラの言葉に『すべての学びの源は神の知識にある。神の栄光は至高であり、これは神の神聖なる顕示者を通してしか到達できない。』とあるけど、この意味を誰か説明できる？」とお母さんが質問しました。

モナが、考えながら説明しました。



「私たちが知っていることは、全部、神の知識からいただいているってことかな。でも、神から直接それを学ぶことはできないので、学ぶためには、神の顕示者を通さなくちゃ。そう言っているんでしょ？お母さん？」

「さすが、モナ。」とお母さんがほめて、「じゃあ、誰が神の顕示者か言える？」とみんなに聞きました。「キリスト！」、「仏様！」、「マホメット！」、「モーゼ！」、「クリシュナ！」、「バブ！」、「バハオラ！」

子どもたちが一斉に叫びました。幼いアニサまでも、その名を知っていました。お母さんが言いました。

「人間は、それぞれの神の顕示者から、何が人間にとって正しくて、何が悪いのかを教わってきただけじゃなく、新しい文明が花開くアイデアと知識も授かったのよ。」お父さんが付け加えて、「新しい神の顕示者が現れる度に、新しい文明が花開いたんだ。まるで春が来たように。そして新しい文化が生まれるけど、人々はだんだん神に従わなくなって、自分勝手になり、文化もすたれて行ったんだな。ちょうど冬が来たように。」次は、お母さんが続けました。

「そして今、最も新しい世界文明というのを築く知識を教えるために、バハオラが来られたというわけ。」

「やったー！！」と子どもたちが叫んで、手を叩きました。お父さんが、「しかし、そこでだ。」と言うと、自分とみんなに言い聞かせるように。「私たち一人一人ができるだけたくさん学ぶように最善を尽くせば、このすばらしくて新しい世界文明を築くお手伝いができるんだ。戦争もなく、誰も貧しくてお腹を空かすということもない、平和と和合の世界にするんだ！」

「みんな、がんばろうぜ！」とリアズが叫んで、「世界がおれたちに期待してるってことだ。だから、みんなしっかり勉強しようぜ！！」みんなは大笑いしました。お母さんがリアズの頭のでっぺんにキスして、勉強の力づけに、お皿に山盛りのクッキーを出してくれました。その勢いで今度は、みんな、はりきって宿題に取り組みました。



クイズ

1. お話の始めで五人のきょうだいは何をしていましたか？

2. その日は寒かったですか？

3. リアズはなぜ怒っていたのですか？

4. 誰も何も習わなくて動物のようになったら、文明はどうなりますか？

5. 私たちが勉強する本当の理由は何ですか？

6. 一番新しい神の知識を何に使えばいいですか？

7. 文明を築く人間の二つの翼とは、何ですか？

8. すべての知識の源は何ですか？

9. 神の顕示者のお名前を、何人か言えますか？

10. バハオラの世界文明ではどんな世界が作られますか？

いくつ答えられましたか？ 答えは保護者のページにあります。





こえだ おりもの
小枝で織物



ざいりよう 材料

*ふたまた (Vの字) になった木のこえだ一本と、まっすぐなこえだよんほん

*しゅういと、けいと

*けいと用のはり

*ビーズ、はっぱなど、かざりになるもの

*はさみ

*ビーズを通す、ふつうの針と糸

つくりかた 作り方

二股の小枝一本を使った織物

*ふたまたになるところから始めて、二股部分にしゅういとをまぐる
はじめと終わりは、糸を小枝にしっかりむすびつける

*二股の始めから、けいと用の針を使って巻いた糸をじょうげにしながら、くぐって行ってけいとを織り込んでいく

二列目からはおろかえして織り込むのを繰り返す

はじめと終わりは、巻いた糸にしっかりけいとをむすびつける

*できあがった織物にビーズとかはっぱなどのかざりをつける。

まっすぐな小枝四本を使った織物

*まっすぐな小枝四本で井の形を作り、せいほうけいじょうげへん
糸をまぐる

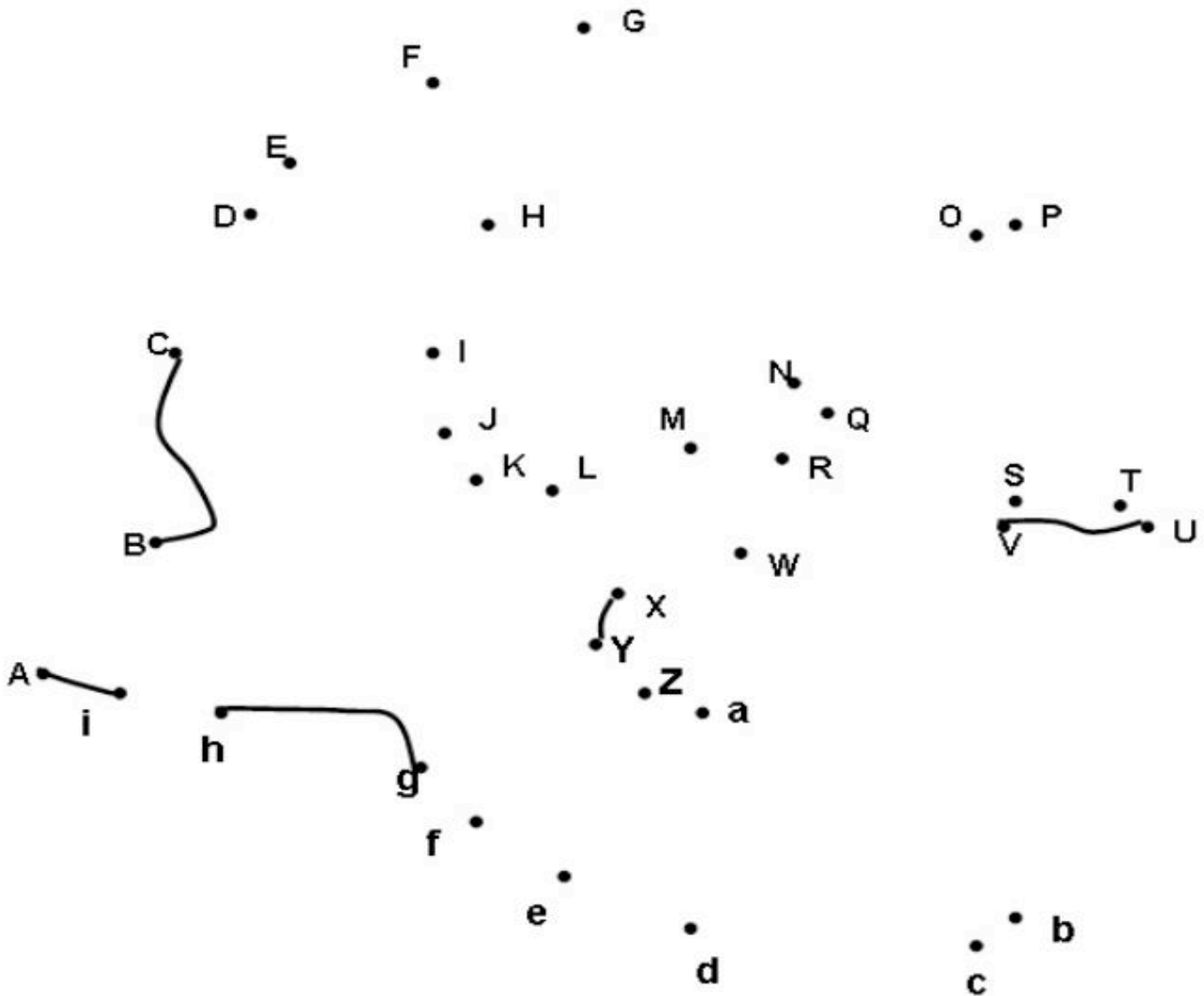
*巻いた糸のよこからけいとを織り込んでいく

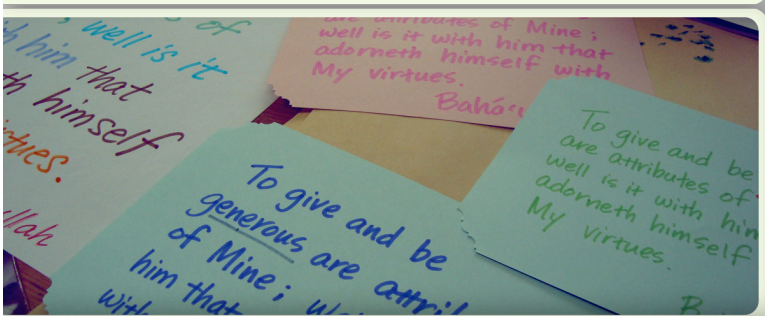
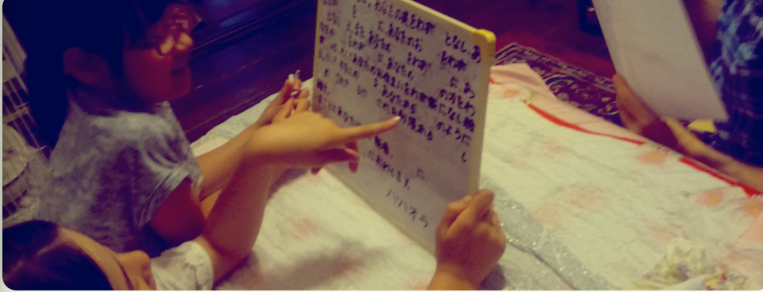
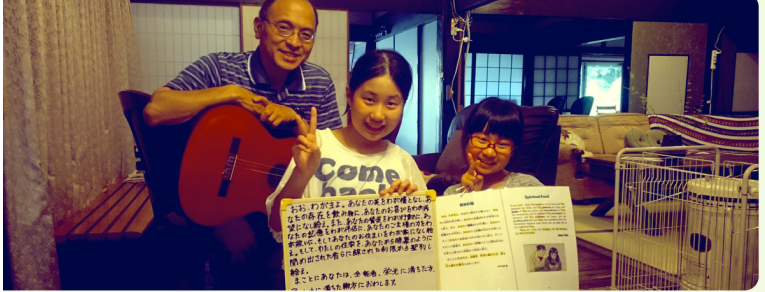
さゆう、どちらからでもよい



ぬり絵

AからZまでと、aからzまでの点を線でつなげていくと、何が見えてくるかな？
翼をひろげた鳥のようだけど、何の鳥かわかる？ 「わし」だよ。





保護者のページ

以下はバハオラとアブドル・バハのお言葉です。お子様と一緒に、「知識」について話し合ってみませんか？

人間は、知識を習得し、崇高な精神的完全性に達し、隠された真実を発見し、さらに神の属性（美德）を現すように定められている。…

アブドル・バハ ロンドンでの講話より

知識は人間の生命の翼のようであり、人間の上昇のための梯子のようである。その習得はすべての者の義務である。しかしながら言葉に始まり言葉に終わるような学問ではなく、世の人々のためになるような学問の知識を習得すべきである。

バハオラ バハオラの書簡 pp. 51 -52

読み書きの習得に最善を尽くすのは子どもたちの義務である。ある者にとっては、最低限必要とされる書く能力を習得するだけで十分で、次には、実用的な知識の学習に時間を費やす方がより望ましく、より適している。

バハオラ すべてのことに優れること p. 2

学問は神からの最大の贈り物であり、知識とその習得は天からの祝福であることは明らかである。したがって、今日の学童たちが、将来、すべての賢き者のうちで最も学識豊かな者になるように、神の知識、教養や科学の習得を促進するために熱心に努め、尽力することは神の友らの義務である。これは、神に対する奉仕であり、また、免れえない、神の命令のひとつである。

アブドル・バハ すべてのことに優れること p. 8

クイズの答：1) 夏休みの宿題こたえに取り組んでいた 2) 暑あつかった 3) 夏休みの宿題しゅくどいをしたくないから 4) 人間にんげんは全然進歩ぜんぜんしんぽしない 5) 世よの中なかを善よくするのやくだに役立つから 6) 新あたらしい世界文明せかいぶんめいを築きずくために 7) 物ものの進歩しんぽと精神せいしんの進歩しんぽ 8) 神かみの知識ちしき 9) クリシュナ、モーゼ、仏様ほとけさま、キリスト、バブ、バハオラ 10) 平和へいわと和合わごうの世界せかい





9月 2016

アスマ BE273

以下のリンクにアクセスすると「ひるの星」をカラー印刷することができます。

<http://hirunohoshi.weebly.com/>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿 7丁目 2番 13号

電話：03-3209-7521 FAX：03-3204-0773

ひるの星委員会：グレン・ロウ、バウデンカービー真己、平原静志、
平原ルアナ

お話と工作：平原ルアナ

ぬり絵：www.prasinipiza

写真：ウィキペディア、平原ルアナ、尊田イヴァ、
グレン・ロウ

さし絵：平本かおり、スティーヴ・パスカル、グレン・ロウ

テクニカルアドバイザー：グレン・ロウ

編集：平原ルアナ

和訳：平原静志

和訳の校正：岩倉宣子

監修：野ロメアリー